

近森病院 言語療法科

科長 井上浩明

概要

近森病院言語療法科は、2020年当初11名体制で運用を開始した。8月に近森リハビリテーション病院言語聴覚士1名とローテーションを行った。12月に1名産前産後休業に入り、現在10名体制で運用している。

臨床・教育面では、主任業務の見直しを図り、教育体制を強化した。具体的には、昨年よりも現場指導の時間を多く設け、直接指導の頻度を増やした。また、各担当患者の定期サマリをカルテに記載するよう規定し、自・他部署に介入目的やゴール設定を明確に提示できるようにした。学生指導では、短期実習生1名の指導を行った。

システム面では、リハビリテーション介入基準を改訂し、脳血管障害患者に対し、以前よりも早期に介入できる体制を構築した。

研究面では、日本言語聴覚学会にて2題発表した。

業務実績

入院・外来患者処方数は、1181件（前年1110件）であった。月別処方数を図1、月別実施単位数を図2、月別摂食機能療法実施件数を図3に示す。脳血管リハビリテーションは、介入基準を改訂したことにより、8月からサービス量が増加している。4月より、言語聴覚士の呼吸器リハビリテーション算定が可能となり、400～500単位と脳血管リハビリテーションに次ぐサービス量を提供している。また、摂食嚥下支援加算を6月より算定開始し、より質の高いチーム医療での摂食嚥下リハビリテーションの提供を行っている。

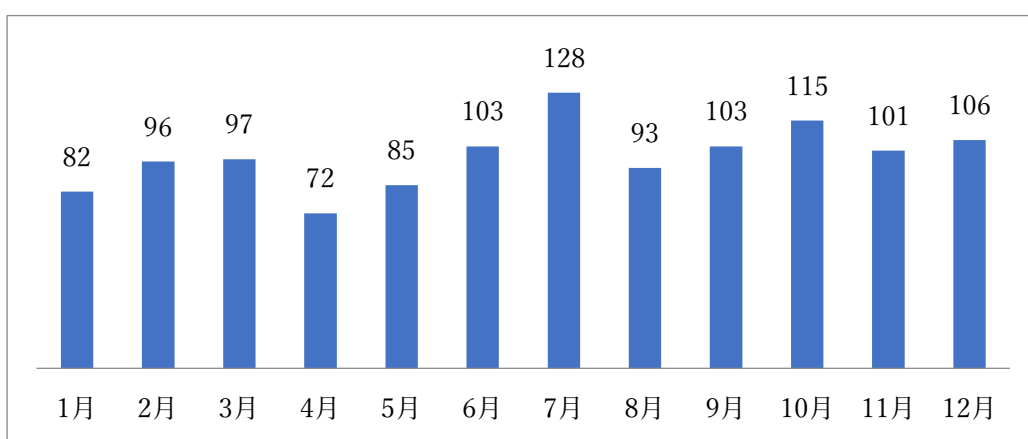


図1. 月別処方数

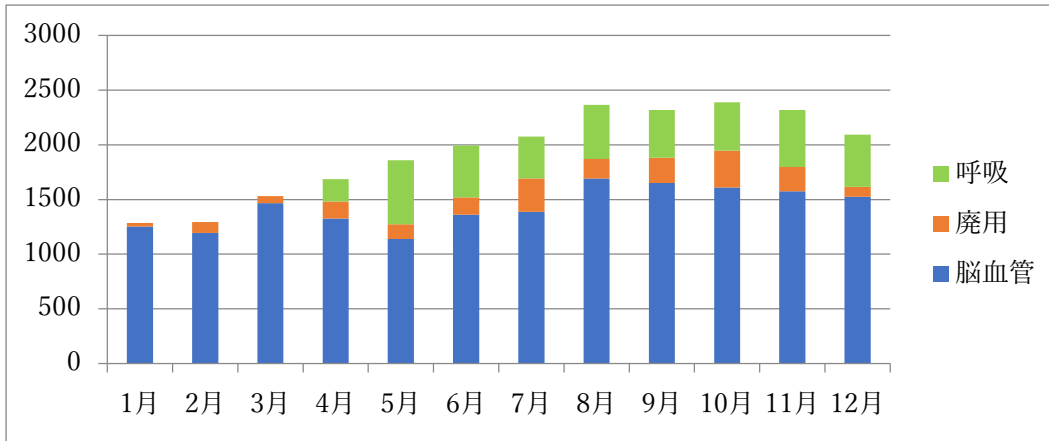


図2. 月別実施単位数

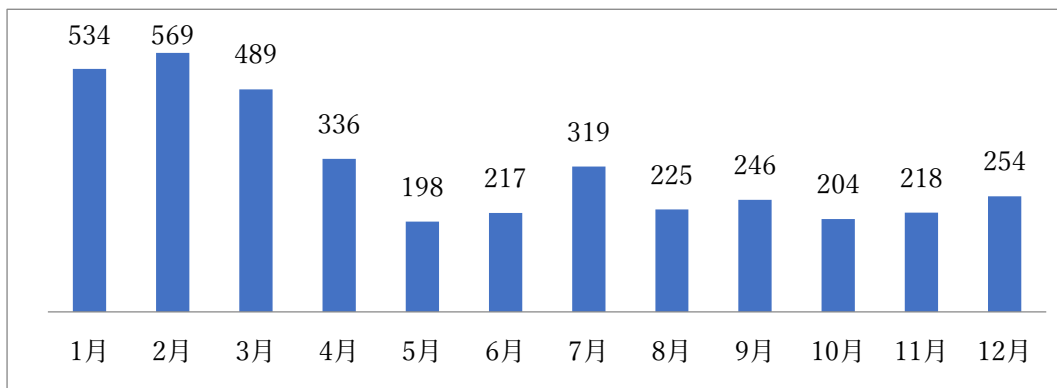


図3. 月別摂食機能療法実施件数

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
件数	10	21	7	17	9	8	13

表. 摂食嚥下支援加算件数

終わりに

2021年は、現在作成中である、より体系化・視覚化させた教育体制を確立し、更なる臨床の質の向上を図っていく。また、研究も組織的に実施し、学術的なレベルアップも行っていく。

学術発表・講演会等

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
急性期での嚥下障害患者に対するSTの役割について	宮尾友香 井上浩明、小林早紀	第21回日本言語聴覚学会	6月19日 茨城
びまん性突発性骨増殖症による頸椎前方骨棘に加え、頸髄損傷により頸椎前方除圧固定術を施行し、嚥下機能低下をきたした症例	河村英行 井上浩明、池祐子	第21回日本言語聴覚学会	6月19日 茨城